
うたかたの夢幻

鷹槻れん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

うたかたの夢幻

【コード】

N6539B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

とある調査のため人間界に赴いた悪魔サルガタナスと、人間界で暮らす乙女、イフェメーラの儚き恋物語。

- 序 -

夢を見る。

自分以外の存在を、一切感じ取れなくなってしまう夢。

周囲は痛いくらい森閑とした闇に沈んでいて、自らの指先さえ視認できない。

声を出そうにも、開くべき口が失われていることに気付く。

このまま誰にも気付いてもらえず、一人消えてしまっただろうか。そう思った途端、恐怖で身動きが取れなくなった。

視界が絶たれたこの常闇の中、声が出せない自分は、どうやって周りと繋がればいいのかだろうか？

こんな状態で死んでしまったら、寂しいだろうな。

己の行く末に待ち構える未来を知っているから、夜毎こんな夢に悩まされるのだろうか？

「お前の理想のタイプはどんな女だ？」

旅立とうと足を踏み出したのと同時に、背後で書類片手にずっと黙っていた悪友が口を開いた。

「知るか！」

それが、今正に異界の門をくぐるうという者に対して告げる言葉か！？

時折こういふ訳の分からない突飛な質問をしてくる男に、俺はしばしば混乱させられる。

「お前が人間界に固執するのは、懇ろな女ねんこでも出来たからだと思っ
ていたんだがな。違うのか？」

「んなわけねえだろ！ 調査のためだ、馬鹿ヤロー！」

そう答えつつも、悪友に問われた言葉が頭の中をグルグルと回るのを自覚した。

それで、なのかも知れない。

異界へと吸い込まれながら、長髪の女性がふと脳裏を過ぎったのは。

全身を圧迫されるような息苦しさいそに身をよじる。苦し紛れに伸ばした腕がたてたかそけき衣擦れの音に、意識が急速に浮上した。

「目が覚めたか？」

薄っすらと室内を照らす明かりを背にして、低く通る声が渡る。

まだ、どこことなく紗がかかった頭で視線を巡らせると、窓を背にして悪友が立っていた。

「バルベリス？ 何でお前がここに？」

確認するようにその名を呟くと、眼前の男が不愉快げに眉間に皺を寄せたのが分かった。

「サルガタナス、お前、自分がどういふ状況にあるか、分かっ

るのか？」

その言葉に、暗闇でも物を見通せる目で周囲を見渡せば、ここが自室の寝台の上であることが分かる。

「あれ？ ……俺、確か……」

ついさつき、人間界に向けて旅立ったはずだ。なのに目の前には先ほど別れたばかりの同胞の姿。何故だ？

「お前のやってる実験だがな、私にはお前が自分の身を危険にさらしてまでやる価値があるようには思えんのだが」

俺の疑問を知ってか知らずか、バルベリスが棘のある口調で言い放つ。

よく分からないが、どうやら俺はこいつに迷惑をかけてしまったらしい。

「あゝ、えっと、その……申し訳ないんだけど……もうちょっと分かりやすく説明してくんねえ？」

このセリフが友をさらに激昂させるだろうことは分かっていたけれど、とりあえず何があったのかを知るまでは、次のリアクションが取り辛い。

案の定バルベリスの形良い眉尻が、一瞬ピクリと上がったのが分かった。

普段から【地獄の公文図書館】なる魔界一大きな書庫の館長というインテリな職務を任されている彼は、基本的に感情を表に出さない。

まばゆいばかりのブロンドと、それに負けないぐらい整った顔立ち。そこに載せられた銀縁の丸眼鏡のせいで、ポーカーフェイスにさらに拍車がかかっている。

自分とは真逆な彼の性格を知らないわけではない俺は、バルベリスの顔に一瞬でも表情が浮かんだことに冷や汗をかいた。

「お前、今回の実験で人間界側の出口として一体どこを選んだ？」

あゝ、実験ね。今回は……確か、そう、山奥にある湖を選んだはずだ。

なるべく人間界に影響が現れないよう俺たち魔族があちら側に転移するには、一体どういう場所が最適なのか？

これが、今俺がやっている実験の趣旨だ。

バルベリスに【公文図書館長】という役職があるように、俺にだって【旅客団長】という職務がある。

要するに、魔界の者が人間界に赴く際の道を開くのが俺の仕事だ。俺の手助けなくして悪魔は人間界に行くことは出来ないし、また、逆にこちら側へ戻ってくることも不可能だ。

理由は単純明快。統率なしに行き来することは、リスクが高すぎるのだ。それはこちら側 即ち魔界側 のリスクではなく、非力な者達が住む人間界のほうにとって、の話ではあったが。

「湖、だったと思うけど……？」

記憶を手繰り寄せてそう言つと、バルベリスがあからさまに溜め息をつく。

「お前のその頭は自分が泳げるかどうかの判断も出来なかったのか？ それとも向こうへ出たら魔族としての能力がなくなることを見念していたか？」

俺はあちら側に出た途端、溺れたのだと友は語った。

結局回復してからもバルベリスからの許可が下りず、俺は実験を再開することが出来ずにいた。

バルベリスは公文図書館で沢山の書物とともに、ありとあらゆる書類の管理も執り仕切っている。

その文書の中には、当然俺が作る人間界へ行く者のリストもあるのだ。

「この一枚は却下だな」

バルベリスに、持ち込んだ書類をにべもなく突き返されてしまったは、どうしようもない。

彼の決裁印がない書類は、公的効力を持たない。つまりは彼の許可なくして魔界を旅立つことは、いくら旅客団長の俺が許可したと

ここで不可能だとも言えるわけで。

「んな意地 悪いこと言うなよ。俺の実験だって立派な仕事なんだぜ？」

実際、そうなのだ。

魔族があちらへ出向けば、その周囲に必ず異変が起こる。それは大抵の場合天災だったりするのだが、自然に起こるものとは規模が違うのだ。悪魔が一人人間界へ移動すれば、十数単位であちら側の命が失われることを俺は知っている。

無益な殺生は余り嬉しくない。

何度そう掛け合っても、バルベリスは聞く耳を持たなかった。

俺以外の者達が人間界へ旅立つのは許すくせに、どうやら俺が行くことは許せないらしい。どんなに巧みに他の者たちのリストへ自分のそれを混ぜても、バルベリスは的確に俺用の申請書だけを弾いて戻す。

そんなこんなで二ヶ月余りの歳月が流れた。

いい加減俺だって我慢の限界だ。

未だに分からず仕舞いになっている、「水中へ道を開いた場合の影響」だって追調査しておかねばならないのだ。

「今日こそは絶対行かせてもらうからな！」

ここ最近は当然の如く他の者達の出立リストに紛れ込ませていた俺用の書類。今日は堂々と一番上に載せてバルベリスに叩きつけてやった。

「ほお。やっと姑息な手を使わず直談判に来たか」

眼鏡の奥で、バルベリスの涼やかな目が一瞬笑ったように感じられた。

そうして、信じられないことにあっさり決裁印が押されたのだ。

「え？ これ……」

「行きたくないのか？」

余りにスムーズに許可が下りたので、正直拍子抜けしてしまった。一瞬何が起こったのか理解出来ずに立ち尽くした俺に、バルベリス

が苦笑混じりにそう返す。

「ま、まさか！ 一体どれだけ足止め食わされたと思ってるんだよ！？」

勢い込んでそうまくし立てた俺に、

「ただし、出現先は私が決めさせてもらう。前みたいな尻拭いはごめんだからな」

冷ややかな応酬があった。

だからと言ってこれはないだろう！と思う。

さすがにここなら溺れることはないと言ってくる。しかし。

人間界側の出口としてバルベリスが指定したのは、こちら側で「日本」と呼ばれる国にある、森の奥地の洞窟だった。

確かにそこなら人間達の居住空間と距離を隔てているし、畢竟何ひつぎやうか起こったとしても影響は出難いだろう。

でも、お陰で俺は危うく死に掛けたのだ。異界と繋がった影響で地震が起こり、洞窟の入口が塞がれてしまったのだから。

水中に道を開いたとき同様、俺が酷い目に遭っていることは見ているだろうに、バルベリスは助けに来なかった。

出掛けに、「今回は何があっても手を出さな」と釘を刺したのもあるだろうが、ああ見えて奴は案外お節介だ。きつと差し迫った危機だと判断すれば、俺がどんなに拒んだところで連れ戻しに来る。それが無いのだから、自力で何とか出来るトラブルということだ。

そう判断した俺は、丸一日かけて入口を塞いだ岩石を取り除いた。ギリギリ通れる程度の隙間を這い出した頃には、言うまでもなく満身創痍。おまけにここは山奥ときている。洞窟を脱したところで人里に至るまでの道のりは、果てしなく遠い。

今回は、頓挫したままの「水中に道を開いた際の影響」も調査対象だ。洞窟へ道を繋いだときの弊害だけを調べて帰るわけにはいかない。

バルベリスにもそのところは話しておいたので、洞窟自体あの湖があった森に存在することは間違いないと思う。

そう当たりをつけて水音のするほうへと歩き始めたのだが、程なくして俺は見事にヘタレてしまった。

魔界のルールに則って、人間界に下ったと同時にあちらへ戻る能力と、現地でのコミュニケーション能力 即ち翻訳能力 以外

が失われてしまったのだから無理もない。

今ここに居る俺は、人間と大差ない存在だ。

「あゝ！ もう、絶対洞窟^{ぜったい}は却下だ！」

俺が生き埋めになりかけた時点で分かり切っていたことだけど、口に出して吐き捨てる余計に腹が立った。

常に過ごしやすい気温の魔界と違い、人間界には温度変化というものがある。

地域差なんかもかなりあるらしいのだが、今俺が居るところは初夏というシーズンのようだ。木陰でじつと動かずにいる分には心地良いが、少し動くと汗をかく。ブーツにマント……なんちゅう格好も手伝って、俺は見事に汗だくになってしまった。

「脱^{だつ}……」

手荷物が増えるのが嫌ですつと我慢して着用していたが、そろそろ限界だ。

マントをはずすと、人界で言うところの軍服姿に近い格好になる。はずしたそれは、思い切って捨て置くことにした。ブーツの中の不快指数もマックスだったが、こちらは脱ぐと歩くのに支障をきたすので我慢することにする。

有るか無きかの微かな水音だけを頼りに歩き回るのも、そろそろ限界かも。

そんな風に辟易し始めた頃、俺はようやく木々の合間を縫って流れる清流に辿り着いた。

「はあゝ。生き返るぜ」

汗で滑^{ぬめ}りを帯びたブーツを脱いで流水に足を浸すと、キンとした冷たさが頭の芯まで伝わった。

源流からそれほど離れていないからか、川幅も広くない分、流れが速く水が澄んでいる。

前に溺れた、とバルベリスに言われたことは忘れていないので、流れに足を踏み入れようとは思わなかった。

手近な岩に腰掛けて水につけた両足を寛げながら、しばしの間まったりする。

「こんにちは」

と、突然背後から声を掛けられて、危うく川に落っこちそうになった。

ぐらりと傾いだ俺の身体に驚いたのか、声の主が慌てて抱きついてきた。

その途端、微かに甘い香が鼻孔をくすぐって、俺は思わずドキリとする。

心臓を落ち着かせようと、回された両腕に視線を転ずれば、それが、俺を支えるには余りにもか細くて頼りないことに気付く。

「ご、ごめんなさい!」

川のせせらぎに負けないぐらい澄んだ声音でそう言うと、彼女は勢いよく頭を下げた。

その動きに、腰まで伸びたふわふわの金髪が肩を滑る。緩やかなウェーブを描く髪は、空から降り注ぐ陽光と、川面に広がる反射光を受けてそれ自体がぼんやり輝いて見えた。年の頃は二十代前半といったところか。

この国の民族は、黒髪・黒瞳が原則だ。先の実験で俺がここを選んだ理由も、実はそれだった。俺も、同じ色合いのそれらを持っていたから目立たないと踏んだのだ。しかし、彼女のこの風貌は異国の雰囲気の色濃く漂わせている。なのに発する言葉は間違いなく日本語のようである。

何か違和感があるけれど、それより何より俺は彼女の美しさに心奪われてしまっていた。

「あ、あの……。大丈夫ですか?」

ぼんやりと自分に見惚れる姿を不審に思ったのだろう。彼女が心配そうに顔を覗き込んできた。

「だ、だ、だ、だ……。っ」

「……。ダダダダ?」

大丈夫だ、と告げたいのに舌がもつれてうまく言葉にならない。

「……大、丈夫……」

ばつの悪い思いをしながらやつとのことですら言つと、彼女がふわり微笑んだ。

「急に声を掛けてごめんなさい。私はイフェメーラ。貴方は……訓練中の兵隊さん？」

服装と、ボロボロな見た目からそう判断されたい。一步下がって俺の格好を見つめると、彼女は心配そうにそう尋ねた。

軍隊やら兵隊やらそんなものとは無縁そうな彼女にとって、そういう輩は怖い部類に入るのかも知れない。

「いや、俺は……」

そこで言葉に窮する。だからと言って「悪魔だ」なんて馬鹿正直に答えたら、それこそイカれた奴だと思われちまう。

「りよ、旅行関係の仕事をしてる。名はサルガタナスだ」

「あながち嘘じゃないし、俺にしてはまずまずの対応だったと思う。
「猿、刀……？」
猿、刀……？」

自分のだって結構難しいくせに、俺の名に激しく悩む素振りの彼女を見て、不意におかしくなった。

「好きなように呼んでくれて構わないよ。俺もあんなのこと、イフェって呼ばせてもらうから」

ある意味凄く強引だな、と思う。でも彼女ならそういうのも許してくれそうなのがした。

「……じゃあ、サルガ、でどう？」

案の定、ニコツと笑ってそう提案すると、彼女は同意を求めようと小首を傾げた。

「いいよ」

どんなのでも、彼女に呼ばれるのなら問題ない。そんな気がした。そう思ってしまうこと自体、自分でも不思議だったけれど、これが一目惚れと言うやつだろうか？

いつの間にか、ちゃっかり俺の横に腰掛けて、同じように足を水

に浸している彼女の横顔を見て、気恥ずかしい思いに駆られる。

「……でも、旅行関係のお仕事でこんなところ、って何か見るものあるの？」

まるで小さな子がそうするように、ゆらゆらと足を揺らすあどけない彼女の仕草に心奪われていた俺は、思い出したように投げ掛けられた言葉に一瞬戸惑った。

「あ。えっと……実は綺麗な景色を探してて迷子になっちゃって」
嘘を偽りで塗り固めながら、苦笑交じりに返した台詞は、困惑しきった表情と相まって信憑性を生んだらしい。

「それは大変！ だからそんな風にボロボロになっちゃったのね」
服装が軍服っぽいとか、そういうことは度外視して俺の言葉を信じてくれるイフェはある意味凄く純粋ピュアなんだろう。

そんな彼女を騙していることに、少なからず罪悪感を覚えたけれど、今はそれに甘えるしかない。

「そうなんだ。汗だくになるし、まあ、最悪だよ」
現状に辟易していたのは事実だ。溜め息混じりにそう告げると、彼女はしばし逡巡した後、

「うちでよかつたら休んで行く？」
にわかには信じられない言葉を告げた。

イフエの家は出会った場所とさほど距離を置かないところにひっそりと建っていた。

この国の建築様式には珍しい石造りの建物は、どことなく魔界の自邸を彷彿とさせた。もちろん、遙かに小ぢんまりとした造りだったが、中に入ってみると思いのほか広さもあつた。

屋内に入つてざつと見回した調度品の感じから、彼女が一人暮らしであることを察した俺は、少し戸惑う。若い女性の一人住まいに見知らぬ男が入り込んでも良いものだろうか。

そんな風に思つてしまつたけれど、彼女の屈託の無い笑顔を見てみると、不思議とそんな心配も吹き飛ぶ。

およそ彼女を前にして狼になれる男なんていないように思われたいし、異性として飛び切り魅力的であるにもかかわらず、何故かイフエからはどこか人間離れた雰囲気か漂っていたからだ。

実際、イフエはとてもミステリアスな面を持った女性だった。突拍子もない申し出をした割には憤み深かったり、案外恥しがり屋の一面を持っていたり。

イフエの家に泊まつた初めての晩、彼女は自分の寢室を俺に明け渡そうとした。

俺のせいで女の子にソファで寝られては適わない。慌ててそう言うつと、

「じゃあ一緒に寝る？」

何でもないことのようにそう尋ねて、俺が動揺する様を見てにわかにか赤面した。多分、その誘いがどんな結果をもたらすのか考えてもいなかったのだ、彼女は。そのくせ俺の表情から自分がどんなに大胆なことを言ってしまったのかを今更のように理解してうるたえる。

そういう天然呆けなギャップがたまらなく可愛く思えて、俺はどんどん彼女に惹かれていった。

結局、色々もめた末に俺がソファ、ということと一件落着いたのだが、それはそれでイフェには気がかりだったらしい。

翌朝目覚めると、家の中にイフェの姿がなくて。

どこへ行ってしまったのかと窓外を見遣った俺の目に、川原で何やら懸命にやっている彼女の姿が飛び込んできた。

何事だろう？と外に出ようとして、俺はブーツがなくなっていることに気付いた。

仕方なく裸足で外に出ると、彼女を驚かせてやろうと気配を消してイフェの背後に立った。

「何やってるんだ？」

俺のブーツを水に沈めてゴシゴシやっている彼女に、思わず笑みが漏れる。

「あ……あの、せめてもの罪滅ぼしにと思って……」

あんまりにも汚れていた俺のブーツを洗おうとしていたのだと言う。

しかし……。

「ごめんなさい！」

詫びのつもりが逆に仇になってしまったようだ。

泣きそうな顔をして頭を下げる彼女を怒る気にはなれなかった。

というより、むしろ笑えて仕方がなかったくらいだ。

皮のブーツを水に浸けちゃマズイ、とかそういうところが抜けているのが、如何にもイフェらしくていいではないか。

彼女がすることならば、俺は何でも笑って許せてしまう気がした。黙ってそこに居るだけで可憐な乙女は、口を開けばそのギャップがたまらなく可愛いのだ。

結局あれから数日を、俺はイフェの家で過ごしてしまっている。「戻らなくてもいいの？」

不安げにそう問いかけてくる彼女に、

「休暇取って来てるから大丈夫だよ」

「またもや口から出任せの言葉で応じる。その台詞に淡い笑みを浮かべると、今度は「いつまでお休みなのか？」ときた。

その時は「一週間ぐらい」と適当なことを言っただけで、案外イフェはその言葉を気にしていなかったらしい。

「一人になるのは嫌だな……」

体調を崩したのか、熱っぽいと訴えるイフェのたつての希望で、少し夜気に当たることにした。彼女の体調を考慮すれば夜風が毒なことは分かっていたけれど、イフェの熱意に押される形でしぶしぶ外に出る。山奥だからだろう。澄んだ空気の中で、半月と星が鮮やかに輝いていた。

それを見ながら二人で話していると、ふと真顔になった彼女が呟いた。

最初、何のことを言っているのか分からなかった俺も、それが「一週間ぐらい」の期日を指したものと気付く。

「イフェが嫌じゃなきゃ……まだしばらくは居られるけど？」

どうせ期日の定められた旅ではない。早く戻らねば嫌味を言う相手は一人しか思い当たらないし。

そこで、いつだったかバルベリスが言った言葉を思い出して、一人苦笑する。

「懇ろな女、か……。確かに出来てしまえば名残惜しいものだ。」

俺の提案に、「いいの？」と戸惑う素振りを見せつつも、笑顔を隠しきれない様子だったイフェが、そんな俺の表情に気付いて訝しんだ顔をする。

「大丈夫だ。俺もイフェと離れたくねえし」

率直に気持ちを吐露すると、不安そうにしていた彼女の頬に朱が差した。

それが、熱で潤んだ瞳と相まって何とも言えず可愛らしくて。その表情が愛しくて、俺は思わずイフェを抱きしめた。

今までずっと我慢してこられたのにどうしたことだろう。自分の大胆な行動に戸惑いつつも、こうなったらいつそ、という思いにも駆られる。

急に抱きしめられてビクツと身体を震わせたイフエも、力を緩めた俺の腕からすり抜けるような無粋な真似はしなかった。

それが、俺の自制心をさらに遠くへ追いやってしまった。

澄んだブラウンの瞳に揺ら揺らと半月を浮かべて俺を見上げるイフエに、半ば吸い寄せられるように俺は唇を寄せた。

口付けはほんの数秒。

でも、その瞬間俺は彼女とは離れられないことを自覚した。

イフエの家に滞在するようになってから幾日かの夜を越えてきたけれど、彼女と寝所を共にするのは今夜が初めてだった。

だからと言って、肉体的快楽に溺れるでもなく、ただお互いの温もりを感じることにのみ重きを置いて、寄り添い横たわっている。

さっき、キスをした折に一瞬ゆらりと燃え上がった情欲の念も、彼女を抱きしめている間に徐々に治まった。普通なら絶対に逆のはずなのに、イフエの肌には不思議とそういう俗な感情を退ける効果があった。

「怖い夢を見るの……」

熱が上がり始めたのだろう。悪寒がすると震えるイフエを、後ろから包み込むようにして目を閉じた俺に、彼女がぽつんと呟いた。

「夢？　どんな？」

「真つ暗闇の中に一人ぼっちなの。何かにすがりたくて一生懸命手を伸ばすんだけど何も掴めない。怖くなって叫ぼうとしても肝心の口がなくなってる……」

思い出すだけで怖いのだろう。背後から回された俺の腕にすがりつくようにして震えながら、手に力をこめる。

「大丈夫。今夜は俺がついてるからそんな夢絶対みないさ。そうだし、そこまで言って、ふとある名案が浮かんだ俺は、寝台を降りて玄

関へ行く。

「ちよつと汚ねえけど、これを枕元に置いて寝たらそんな悠長な夢、見てらんねえと思うぞ?」

例の、水に濡れてよれよれになった俺のブーツ。丸洗いの甲斐あって目眩がするほど臭くはないと思うけれど、だからと言って全く無臭という風にもいかなかったものだ。

あの洗濯騒ぎのあと、結局、イフェの心遣いが嬉しくて新調する気にもなれず履いてしまっていたし。

「サルガのブーツ?」

「そう。臭くて魔よけになる」

そう言っ頭をくしゃりと撫でると、薄暗がりの中、イフェが微笑かに笑う気配がした。

「そうね。真つ暗闇でもこの臭いを頼りに歩いて行けばいいもんね」

その通りだと太鼓判を押すと、イフェはやつと安心したようだ。

有難う、と呟くと、ややあつて静かな寝息が聞こえ始めた。

朝、目覚めると、隣にあるはずのイフェの温もりが失われていた。寝起きでぼんやりとした頭が、その事実を認識したと同時に急速に覚醒する。

「イフェ……っ!？」

俺のブーツを抱きしめるようにしてまぶたを閉ざした彼女は、壮絶なまでに美しかった。

血の気の引いた蠟人形のような肌。薄暗い部屋にあっても光を失わない柔らかな髪。

その全てが手に触れられるのに、肝心な魂だけがそこには宿っていないことを感じて俺は愕然とした。

「何で……」

昨夜会話を交わした折には何の問題も無かったのに。イフェの亡骸を抱き締めてうなだれる俺は、いつの間にか川原にいた。イフェの家があったことすら幻のように何も存在しないことで、しかしそんなこと大したことではないと思いつつ、俺はただ呆然と座り込む。

「サルガタナス」

聴き慣れた声が掛けられるのを、遠い意識の彼方で聞くとは無しに耳にする。

「それが、お前が先に行つた実験での影響だったんだよ」

諭すように、労わるように、静かな声音で友が語りかける。

俺の手の中には、最早イフェの姿すらなく、ただ膝の上にカゲロウの死骸がひとつ。

成虫になると、食料を採り入れるための口が退化してしまうというカゲロウ。日本では、儂いことの例えに使われる虫。

それが、イフェの本当の姿だった。

「……彼女、幸せだったかな」

問いかけるでもなくポツリと呟いたセリフに、バルベリスが「もちろんだ」と応えてくれる。

その言葉を聞くと同時に、堰を切ったように涙が溢れてきた。

「Ephemer^{イフェメラ}はギリシャ語で一日だけの存在を意味する言葉だ。そうしてカゲロウを指す言葉でもある」

俺とイフェの間起こったことを概ね把握しているのだろう。

何の脈絡もないように告げられたバルベリスの言葉を、俺は何度も頭の中で反芻した。

一日だけの存在。カゲロウを指す言葉。

今にして思えば彼女が俺の理想の姿を保っていたことにも、納得がいく。全ては俺の欲求の上に成り立った幻影なのだから。でも、姿はどうあれ中身は 魂は 彼女自身のものだったはずだ。

死した後、暗闇で迷ってしまうことを恐れていたイフェ。

俺は小さな虫の亡骸を、ブーツとともに埋葬した。

これがある限り、俺のところに戻って来られるよな？

次に生まれてくるときも、絶対に俺の元へたどり着け。

晴れた空を見上げながら、俺はそう願わずにはおられなかった。

END

- 4 - (後書き)

最後まで読んでくださって有難うございました。
感想などいただけたら嬉しいですよ。(*)
*() 〇

うたかたの夢幻

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539b/>

うたかたの夢幻

2008年11月7日08時40分発行